

平成9年度 主要地方道津闊線国補道路改良事業地内埋蔵文化財発掘調査報告

窪田大垣内遺跡(第3次)・管ヶ谷古墳群発掘調査報告

1 9 9 7 · 8

三重県埋蔵文化財センター

序

今回、発掘調査をおこなった窪田大垣内遺跡の地は、古来から「久善多里」や「窪田荘」として知られる歴史的風土をもち、わけても京の都から伊勢神宮へ参拝する交通ルートとして、重要な位置を占めてまいりました。

伊勢別街道から県道津関線へと連続とつづいてきたこの道路は、現代においても本県の経済的にみた大きな幹線であり、交通量の増加と津市街地での混雑緩和の上からも、その整備が県民から強く望まれております。

この道路整備に伴ってこれまで窪田大垣内遺跡の2次にわたる発掘調査が実施され、古代末期から中世にかけてのムラの様子が判明するなど極めて大きな成果をあげておりますが、現代生活の至便と引換にやむなく失われる、こうした歴史的風土を背景とする価値の高い文化財を、せめて記録のかたちででも残すこととは、現代に生きる我々の最低限度の責務と言えましょう。今回の窪田大垣内遺跡と管ヶ谷古墳群の調査成果が、こうした報告書を通して、少しでも数多くの方々に活用されれば、文化財保護行政に携わる者として幸甚この上ありません。

なお、今回の発掘調査では、県土木部道路建設課、津土木事務所の他、地元の方々から様々な形でご協力を賜りました。ここに深く感謝の意を表します。

平成9年8月

三重県埋蔵文化財センター

所長 奥村敏夫

例　　言

1. 本書は、三重県教育委員会が三重県土木部から執行委任を受けて実施した、平成9年度主要地方道津闊線国補道路改良工事に伴う、津市大里窪田町地内に所在する窪田大垣内遺跡（第3次）と管ヶ谷古墳群の発掘調査報告書である。

2. 調査は下記の体制で行った。

調査主体 三重県教育委員会

調査担当 三重県埋蔵文化財センター

技　　師 大川勝宏

技術補助員 川崎志乃

3. 発掘調査後の出土遺物の整理は、調査担当者の他、管理指導課が協力した。

4. 本書の編集は大川勝宏が行い、遺物実測は川崎志乃が、遺物撮影は大川・川崎が行った。

本文の執筆はⅠ～Ⅲ、V章を大川が、IV章を川崎が担当した。

5. 掃図の方位は全て座標北を用いた。なお、当地域は国土調査法による第VI座標系に属する。

6. 本書で使用した事業計画図面は三重県土木部の提供による。

7. 本書で報告した図面・写真などの調査記録および出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターで保管している。

8. 調査は当初、「窪田大垣内遺跡（第3次）」として着手しており、遺物量も少ない事から管ヶ谷古墳群の遺物も同名の整理箱に収納している。

9. 本書で用いた遺構表示略記号は、下記のとおりである。

S D : 溝 S K : 土坑

10. 調査にあたっては、三重県土木部道路建設課、津土木事務所ならびに地元各位のご協力を得た。また、現地作業に際しては、以下の方々にご尽力頂いた。記して感謝の意を表したい。

馬場久昌 立松明 榎田憲二 榎田節子 草川ふさ子 藤井正子 後藤定男

後藤憲一 辻カネ 藤井千代子 藤井文子 宮村ヒサノ 宮村マス 澤野芳

赤坂栄子 草深ツタ子 （敬省略）

11. スキャニングによるデーター取り込みのため若干のひずみが生じています。

各図の縮尺率は、スケールバーを参照ください。

本文目次

I 前 言	1
II 位置と歴史的環境	2
III 遺 構	4
IV 遺 物	10
V 結 語	14

挿図目次

第1図 遺跡位置図 (1:50,000)	3
第2図 遺跡地形図 (1:5,000)	4
第3図 調査区位置図 (1:2,000)	5
第4図 A地区（窪田大垣内遺跡調査区）平面図 (1:200)	6
第5図 A地区（窪田大垣内遺跡調査区）土層断面図1 (1:100)	7
第6図 A地区（窪田大垣内遺跡調査区）土層断面図2 (1:100)	8
第7図 A地区（窪田大垣内遺跡調査区）土坑・溝実測図 (1:40、1:80)	9
第8図 B・C地区（管ヶ谷古墳群調査区）土層断面図 (1:100)	9
第9図 出土遺物実測図 (1:4)	11

表 目 次

第1表 出土遺物観察表	12
-------------------	----

図版目次

図版1 調査区遠景（南から）	15
調査前風景（南から）	15
図版2 A地区調査前風景（北から）	16
A地区南半全景（北から）	16
図版3 A地区南半全景（東から）	17
A地区北半全景（北から）	17
図版4 A地区南半SK1（北から）	18
SK2（南から）	18
図版5 SK3（東から）	19
SD1（北から）	19
図版6 A地区北半攪乱坑（南東から）	20
A地区調査風景（西から）	20
図版7 B・C地区調査前風景（西から）	21
B地区全景（南から）	21
C地区全景（東から）	21
図版8 窪田大垣内遺跡・管ヶ谷古墳群出土遺物	22

I 前 言

1. 調査の契機と経過

鈴鹿郡関町と津市白塚を結ぶ主要地方道津関線のルートは、古代より京と伊勢を結ぶ重要な幹線であり、室町時代から多くの文献に現れ、江戸時代以降整備が進み、明治時代以降は「伊勢別街道」と呼ばれてきた。現在は国道1号線と23号線を連絡する道路として自動車交通量も多く、津市内において朝夕の慢性的な渋滞を惹起している。また、津市大里から一身田にかけての地域は、県総合文化センターなどのインフラの計画・建設が進み、これらの施設へのアクセス面の整備も焦眉の急となっている。

窪田大垣内遺跡は、この主要地方道津関線道路改良工事の事業照会を受けて、三重県埋蔵文化財センターが平成2年度に実施した分布調査により新たに発見された遺跡である。平成5年度には道路本線の建設工事に先立ち、「大垣内遺跡」として第1次、平成8年度には、名称の混同を避けて「窪田大垣内遺跡」として、前回の北西の延長部の県道草生窪田津線と合流する地点までと、本線と交差する農道部分を第2次として発掘調査が実施された。この2次にわたる調査の総面積は6,400m²である。

これまでの2回の調査では奈良時代～室町時代の掘立柱建物や井戸、溝などが多数検出され、多量の墨書き器や木製品など出土遺物の面からも大きな成果をあげている。

今回の調査は、前年度の県道との合流地点からさらに北西側の部分で、行政上は津市大里窪田字管谷286-3番地他にある。志登茂川右岸域の洪積台地を開拓した丘陵の小谷部にあたり、これまでの経緯から窪田大垣内遺跡の縁辺部と考えられたため、平成9年3月18、19日にグリッド掘りによる試掘調査を実施した。この内の県道交差点に最も近い箇所から山茶椀片などが出土し、この担当者によれば幅3m、地表からの深さが1.9mの大溝を検出したと判断され、またここから約80m離れた試掘坑では、表面が磨滅した円筒埴輪片と鰐付円筒埴輪と考えられる破片が出土しており、すぐ北西側の標高約30mの丘陵上に管ヶ谷2号墳がある事から、この南側のA地区を窪田大垣内遺跡（第3次）、北側のB・C地区を管ヶ谷古墳群調査区として、合計2,500m²の範囲を対象に本調査を実施することになった。

2. 調査の方法

道路改良事業地内は小谷地で見通しが悪く、窪田大垣内遺跡、管ヶ谷古墳群両地区の間に指定解除がなされていない保安林が伸びているため、小地区的設定はA地区にのみ調査区の形状にあわせて行うとした。またA地区は、南東端で石積神社移転の工事が行われている都合上、今回の調査範囲からは削除したため、不整し字形の調査区となった。なお、調査が進行するにつれ、試掘報告と整合しない事が判明し、適宜サブトレント（略号t r）を掘削して断面の観察を行い遺構面の確認に努めた。

管ヶ谷古墳群調査区は、現況でもかなり崩落の進んだ丘陵斜面であり、据部の緩傾斜地に丘陵尾根に平行して長さ約28m、幅約3mのトレント状の調査区（B地区）と約5m×3mのグリッド調査区（C地区）を設定して、遺構・遺物の分布を調査した。

調査区の平面図は1:40、1:100の平板測量により、遺構の詳細図および調査区断面図は、個別に1:20の実測図を作成した。

3. 調査日誌抄

- 4/14 津土木事務所と調査前の事前協議（建設2課：板谷泰男、埋文センター：前川嘉宏、大川勝宏）。
- 5/6 A地区の重機による表土掘削開始。
コンテナハウス等設置。
- 5/8 事前把握されていなかった水道管を破損し津市水道局により補修。
センター、藤方倉庫より道具類の搬入。
- 5/12 現場作業に作業員が入る。t r 1掘削。
発電機、ベルトコンベアー搬入。
A地区北半の擾乱は激甚と判明。
- 5/13 試掘N1の埋土除去。山茶椀など多数遺物出土。大溝でなく土坑状の遺構と判明。
- 5/14・15 降雨により、現場作業中止。
- 5/16 ベルトコンベア設置。重機掘削終了。

5/20	t r 2 掘削。地山面しか観察されない。 A地区北半全景撮影。午後より激しい雷雨 のため作業中止。	6/5	C地区掘削、撮影。道具類の搬出。 作業員の投入終了。
5/21	掘削作業中止。平板実測開始。	6/6	リース機材の返却。
5/22	試掘No.1より t r 3 を延長して掘削。	6/9	津土木事務所へ現場引き渡し（建設2課 ：板谷泰男、埋文センター：前川嘉宏）。
5/23	A地区東半実測。		4. 文化財保護法等による諸通知
5/26	A地区東半撮影。		文化財保護法（以下、法）等にかかる諸通知は、 以下により文化庁長官等に行っている。
5/27	t r 3 西へ延長。t r 4 掘削。試掘No.1 周辺は下層面から S K 3 として掘削。		・法第57条の3 第1項（文化庁長官あて） 平成9年4月21日付道建第770号（県教育長通知）
5/28	県立緑ヶ丘養護学校から15人見学。		・法第98条の2 第1項（文化庁長官あて） 平成9年5月7日付教文第967号（県教育長通知）
6/2	A地区ベルトコンベア撤収。 B地区の水抜きと人力掘削。		・遺失物法にかかる文化財発見・認定通知（津警察 署長あて） 平成9年6月20日付教理第11-33号（県教育長通知）
6/3	A地区南半全景撮影。平板実測終了。 B地区掘削・撮影。若干の埴輪片出土。		
B地区の上方に新たにC地区設定。			
6/4	降雨のため、現場作業中止。		

II 位置と歴史的環境

窪田大垣内遺跡（1）の今回の調査地は、地形的には標高19m前後の、第三紀鮮新系に属する奄芸層群を志登茂川水系が開拓して形成した丘陵地と小谷に位置する。この丘陵と志登茂川沖積平野との比高は約20mほどある。現況は道路工事のため山林と荒蕪地となっているが、かつて個人住宅と養豚舍があり、A地区の中央には地蔵尊や五輪塔を祀る祠があつた。また、地元の聞き取りによると、この背後の谷部は湿地状になっており、様々な廃棄物が投棄されていたと言われる。

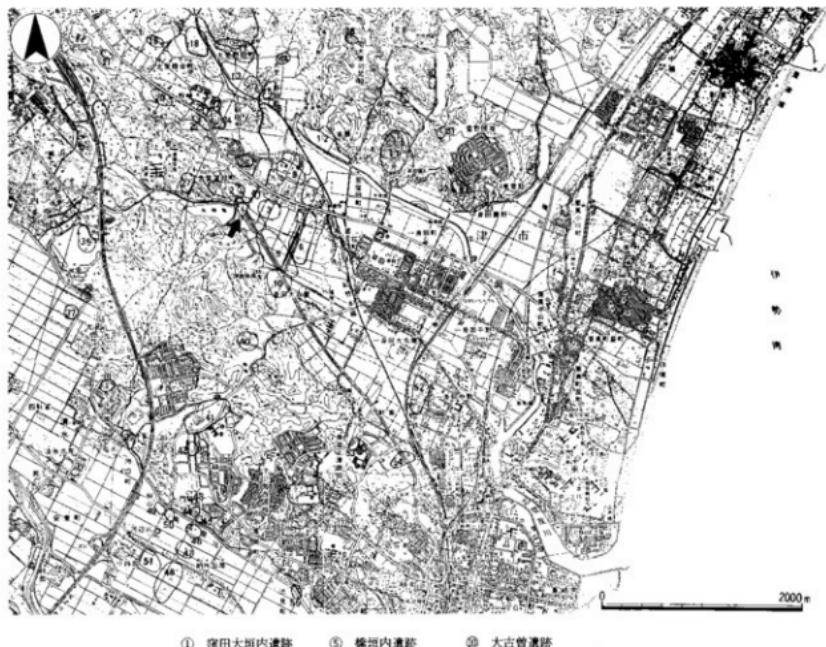
窪田大垣内遺跡は、これまでに2次の本調査を実施しており、歴史的環境についての詳細な記述は先報告^②に譲りたいが、今次調査の成果に関連するとみられるものについて整理しておきたい。

時代の順を追ってみると、今回の調査に先立つ試掘調査で円筒埴輪と縄部とみられる埴輪片が出土しているが、背後の丘陵上には管ヶ谷古墳群があり、このうち2号墳（2）が今回調査地（B・C地区）の上手にある。直径13.8mの円墳で、須恵器高杯・魁・短頸壺・長頸壺が出土したとされる。^③また、この西側に分布する墓の谷古墳群1号墳（27）では木棺直葬の主体部から鉄鏃の出土をみている。^④また、古墳時代の遺跡では、大規模な祭祀が行われた大溝

が発見され、滑石製模造品や木製祭祀具、初期須恵器や韓式系土器など大量に出土した六大A遺跡（7）の存在を忘れてはならないだろう。特に、調査の概要報告において、周辺に初期須恵器の窯跡が存在する可能性が指摘されている。^⑤

次に窪田大垣内遺跡のこれまでの発掘調査成果からみてみたい。第1次調査では4,600m²の調査区を南北からA～C地区に分け、合計26棟の奈良時代から平安時代にかけての掘立柱建物、溝、土坑、井戸の他、古墳時代以降の溝や旧河道が検出されている。^⑥ A・B地区の建物は、平成元年度に津市教育委員会が、北方で実施した安養院跡（3）の調査で検出されている建物と棟方向を揃えており、この2遺跡は本来一体のものである可能性が指摘されている。^⑦ 遺物では瓦片や円面鏡、多量の墨書き土器など、一般集落とはやや隔絶した感が持たれる。

第2次調査は1,800m²を対象とし、調査区の中央で大規模な削平を受け、擾乱の溝が走っていたが、第1次調査C地区的ものと棟方向を揃える鎌倉時代から室町時代の掘立柱建物1棟、井戸7基、区画溝と考えられるものを含む溝10条が検出され、時期的にはやや新しくなるが、集落跡としては連続して広がっている。^⑧



① 廣田大垣内遺跡
 ② 箕谷古墳群
 ③ 安養院跡
 ④ 政所跡
 ⑤ 橋垣内遺跡
 ⑥ 六大A遺跡
 ⑦ 六大B遺跡
 ⑧ 中寫遺跡
 ⑨ 大古曾遺跡
 ⑩ 川北遺跡・川北城跡
 ⑪ 畠の谷古墳群
 (※本書に開述する遺跡名を示した)

第1図 遺跡位置図 (1:50,000)

志登茂川中下流域は、「一ノ坪」や「い之坪」などの地名に示されるように、条里地割りが認められているが、廣田大垣内遺跡の近傍で調査が継続されていった一般国道23号線中勢道路関連の調査でも、六大B遺跡（6）で検出された、条里推定方向とほぼ一致する規則的な配置をとる平安時代の掘立柱建物群や、多量の縁結陶器が出土している事⁸は廣田大垣内遺跡第1次調査の成果との関連から注目され、同時期の橋垣内遺跡（5）でも掘立柱建物が検出されている。律令制の開始とともに、平城宮出土木簡に「伊世国奄伎郡久善多里私部小[]」とあることはよく知られており⁹、これら一連の調査成果とあわせ、律令期にあってこの地が奄芸郡の中心であった事が窺われる所以である。

中世に入ると、これまで遺跡の分布に大きな変化が現れる。六大B遺跡などから建物跡が見られなく

なり、集落の中心が移動したとみられる。

鎌倉時代に当地は「廣田庄」に比定され、「吾妻鏡」の文治三(1187)年3月30日付「公卿勅使伊勢國駅家雜事勤否散狀」によれば因幡前司大江広元を地頭とする「不勤仕庄」として記載されている。¹⁰ 政所跡（4）は、その実態が全く知られていないが、こうした経緯に係るものであろうか。廣田庄は承久の乱(1221)の後、伊勢神宮にも一時寄進され、以後攝関家が本所、預所職を、北条氏が地頭職を得ている。南北朝期に京都若王子神社に寄進され、中世後期には長野氏、雲林院氏の支配下にあったといわれる。¹¹ 廣田大垣内遺跡の第2次調査では室町期の井戸が、安養院跡では小規模な掘立柱建物、井戸、溝などが検出されているものの、この時期の遺構はあまり検出されていない。室町時代には京都から伊勢への街道(現在の県道10号線)周辺の集落が発達していく

ためと考えられている。

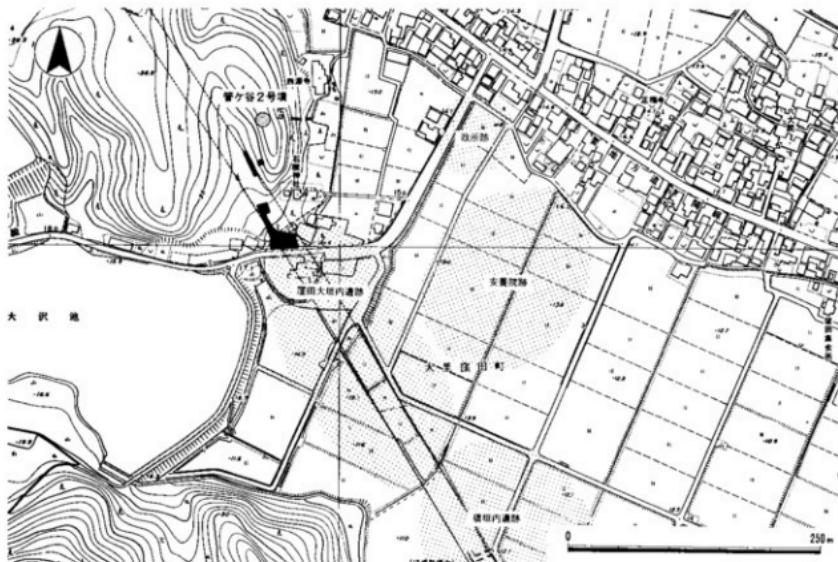
こうしたこれまでの調査の状況と、試掘の結果から、今回の調査範囲では、地形的制約を感じるもの、中世集落の一部や古窯跡の発見が期待された。

(註)

- ① a 三重県埋蔵文化財センター『大里窪田町大垣内遺跡』現地説明会資料 1993
- b 三重県埋蔵文化財センター『平成5年度三重県埋蔵文化財センター年報5』 1993
- c 木野本和之『窪田大垣内遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター 1997
- ② 津市教育委員会『津市遺跡地図』1988
- ③ 萩室康光『津市大里墓の谷1号墳発掘調査報告』津市教育委員会 1976

- ④ 稔積裕昌他「II. 六大A遺跡」「一般国道23号中勢道路埋蔵文化財調査概報Ⅱ」三重県埋蔵文化財センター 1995
- ⑤ 前掲①a, b
- ⑥ 前掲①b
- ⑦ 前掲①c
- ⑧ 浅生悦生他「III. 六大B遺跡—B~G地区」「一般国道23号中勢道路埋蔵文化財調査概報Ⅲ」三重県埋蔵文化財センター 1991
- ⑨ 平松令三他「窪田村」「三重県の地名」平凡社 P396 1983
- ⑩ 前掲⑨
- ⑪ 前掲⑨

III 遺構



第2図 遺跡地形図(1:5,000)

1. A地区（窪田大垣内第3次調査区）の遺構

(1) 調査区の設定と概要

当初約1,300m²を調査範囲として設定したが、先述のとおり、保安林の指定解除が間に合わなかったり、隣接した石積神社を移転する工事の関係車両の進入路を確保する必要があり、当初着手できる面積は大幅に削られ、不整し字形の調査区となった。

現況は舌状小谷の開口部にある荒蕪地で、中央部を若干削平して地蔵尊の祠が置かれたり、周辺に瓦やコンクリート片、各種廃棄物などが多量に散在している状況で、旧来の地形はかなり改変されている事が予想された。

排土の処理上の問題から、南の低位部から上位部に向けて掘削を行ったが、現地表面下約0.7~1.3mで、調査区の南と北の2箇所で大規模な地形擾乱部分に当たった。南側は撤去された個人住宅の基礎や水道管理設、工事資材の投棄により北西に向けて落ち込んでいく。埋土には地山崩壊ブロックの他、現代の瓦、陶磁器、コンクリート片が大量に含まれていた。サブトレーンチ（tr 3・4）を掘削して断面

を観察したが、検出面から50cm以上擾乱されており、遺構は全く遺存していないと判断された。

北側は調査区の東外に統く、小支谷状の自然地形の落ち込みに統く延長部分と考えられ、陶磁器やガラス製品、ビニールなどの廃棄物のみの層を成しており、地元住民の聞き取りでも、近年まで湿地状の落ち込みをゴミ捨て場としていたという事である。重機により擾乱底まで部分的に掘削を試みたが、地表面下から最大で2mを越える擾乱を受けている事が判明した。このような事情により、先述の保安林部分や工事進入路部分は、この擾乱坑や無遺構部にあたるとみられ、調査対象から除外する事とした。最終的な調査区面積は約750m²である。

上記の擾乱部分以外では安定した地盤面が確認され、調査区南東では、試掘調査では確認をしていないが、部分的に円礫を含んだ白色～黄褐色の埴土面（上層面）に遺構が掘削され、北半から南西部では奄芸層群に属するとみられる均質な黄灰色板細砂層面（下層面）が広がっており、これらを遺構検出面と把握した。遺構は上層では土坑2基、溝1条、下層では土坑1基が検出された。

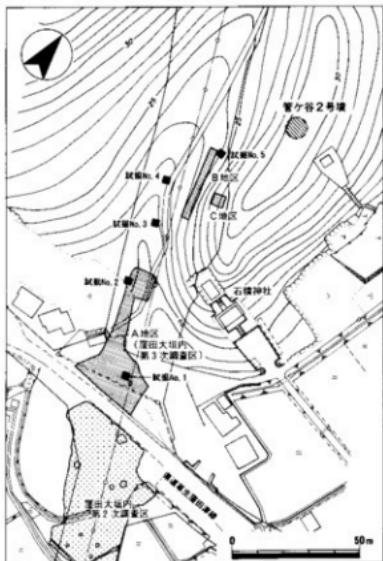
(2) 上層遺構

調査区南東隅部分の黄褐色礫層～埴土層、固結度の高い浅黄色板細砂層を掘り込んでいる。

S K 1 調査区南端で検出された土坑で、調査区外へと続いている。検出部分の規模は直径約3.7m、深さ約0.8mで、底部はやや不整形を呈する。埋土中程から山茶碗などの中世陶器、土師器鍋片が出土している。

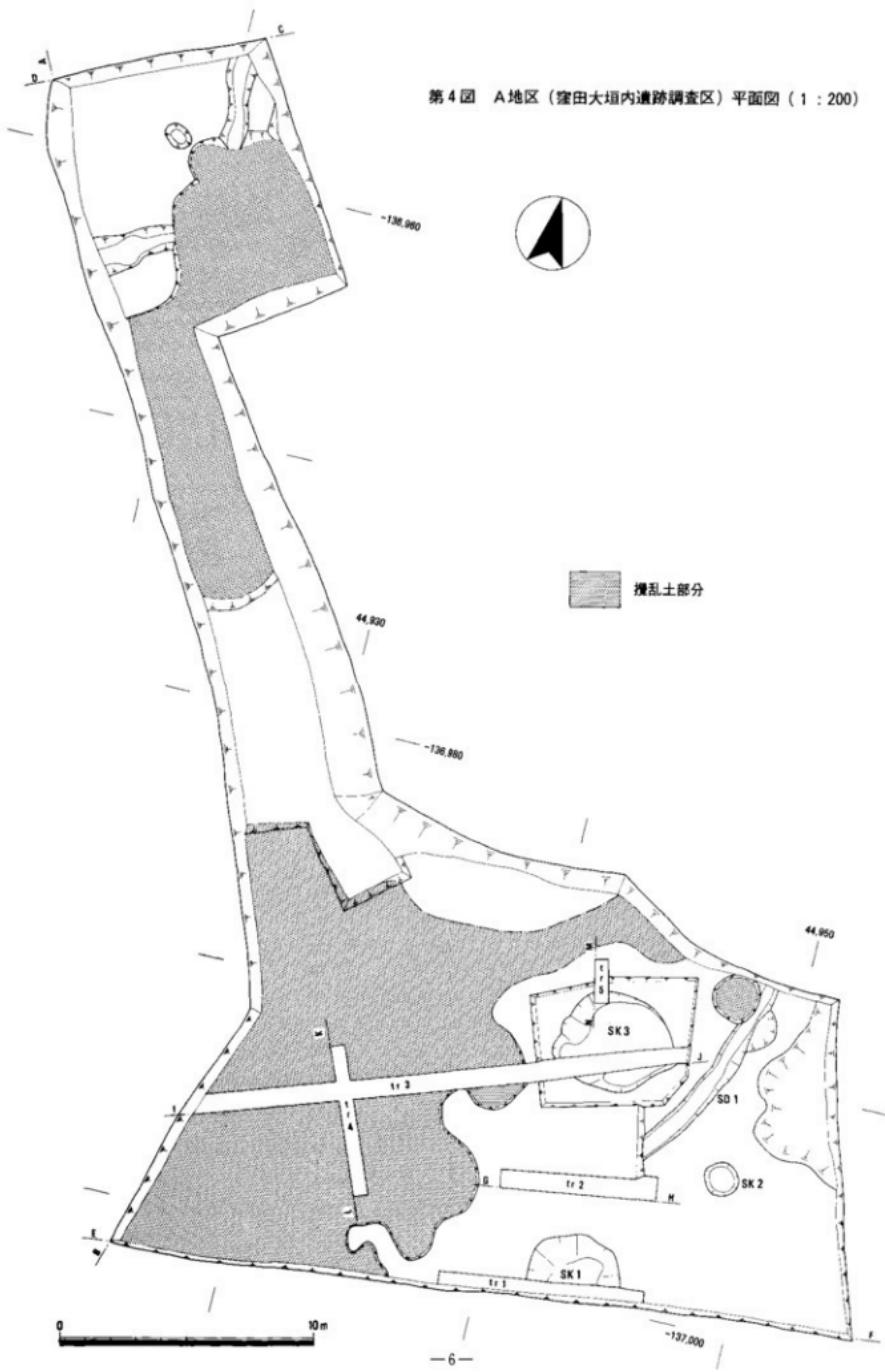
S K 2 S K 1 の北東約5mに位置する直径約2.7m、深さ約2.0mの円形の土坑で、亜円礫層を穿った丸みのある底部には鉄分が厚く沈着していた。現状では涌水はみられないが、井戸である可能性がある。上層と下層に埋土は分離できるが、出土遺物からは顯著な埋没時期差は認められない。主に上層から山茶碗、山皿などの中世陶器類の他、土師器片や丸瓦が出土している。

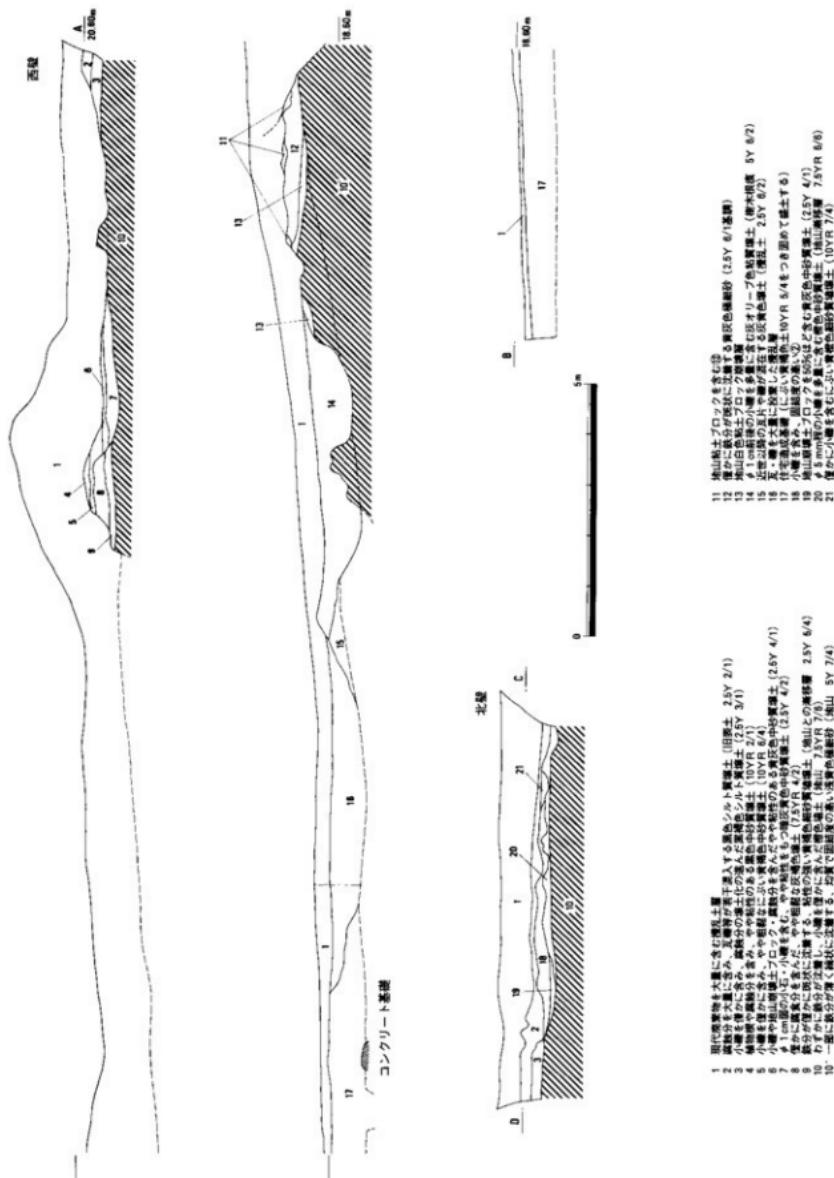
S D 1 南西から北東に向かってゆるやかな弧を描く溝で、幅約1.0m、深さ約0.7mで断面は半円状を呈する。常滑産壺など中世陶器類や土師器羽蓋片などが出土した。



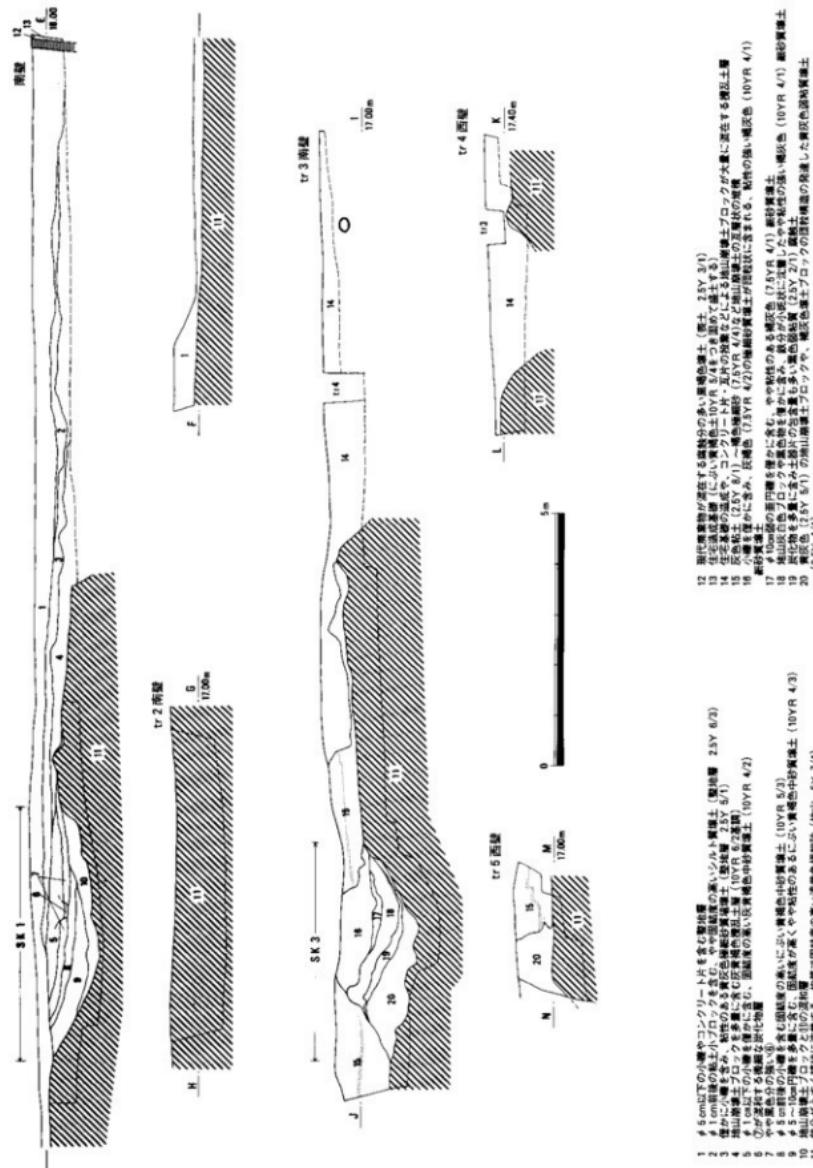
第3図 調査区位置図 (1 : 2,000)

第4図 A地区（窪田大堤内遺跡調査区）平面図（1:200）

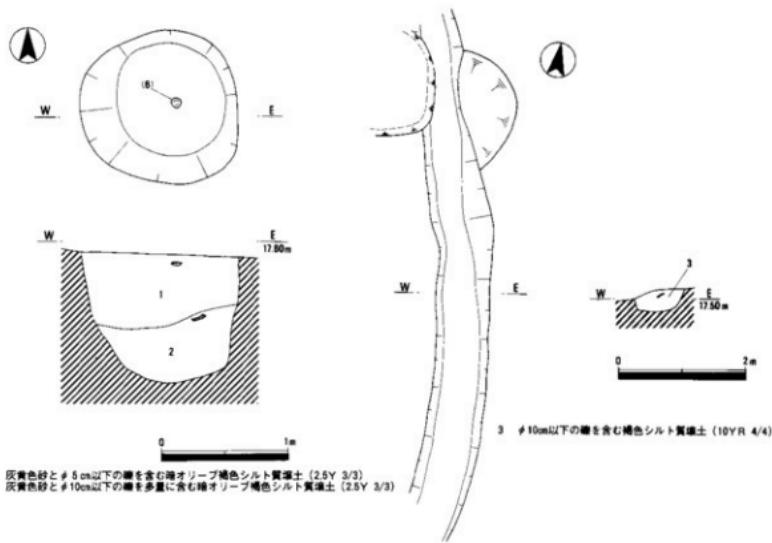




第5図 A地区（窪田大垣内遺跡調査区）土層断面図1（1:100）

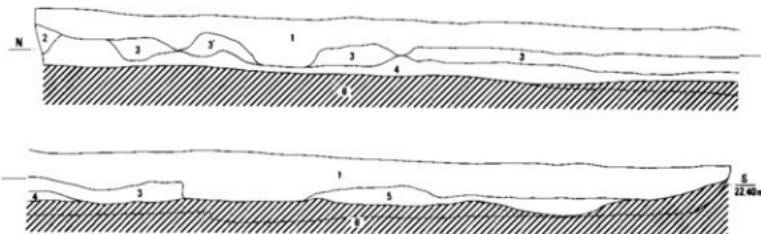


第6図 A地区（窪田大堤内遺跡調査区）土層断面図2 (1:100)

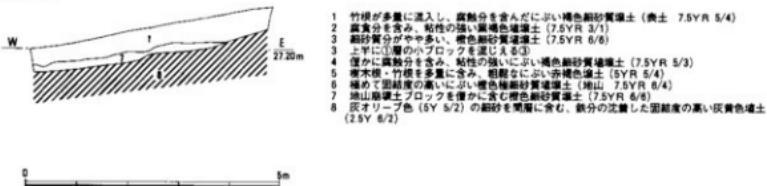


第7図 A地区（窪田大堤内遺跡調査区）土坑・溝実測図1 (1:40, 1:80)

B地区東壁



C地区北壁



第8図 B・C地区（管ヶ谷古墳群調査区）土層断面図 (1:100)

(3) 下層遺構

本調査に先立つ試掘では、上層遺構基盤面に相当する白色～黄褐色埴土層に重複された、黒色土層を間層に挟む黒褐色土層が確認されており、これを幅3m以上、地表面下1.9mの深さの大溝と判断していたが、この掘形を明らかにするために攪乱部分を避け約0.5～1.0m下の下層面まで掘削した。なお、上層土の広がりや下層遺構が溝状に延びるかどうかを確定するためサブトレンチ（t r 1・2）を設定したが、試掘坑から北東に向かって幅約10mの範囲にのみ上層土が広がっており、下層面も東に向かって傾斜していく事が判明した。従って、大溝と誤認された黒褐色土は土坑の埋土である事が判明した。

S K 3 下層面上で直径約4.9m×約4.0m、深さ約1.8mの土坑で、微細な炭化物を含んだ黒色土を間層として上下2層に分離出来るものの、遺物から時期差は看取できない。遺物には山茶椀、山皿、鉢などの中世陶器や土師器皿、白磁片の他、混入とみられる須恵器片があり、上層下部付近での出土が多い。なお、S K 3 の埋土の大半は試掘段階で掘削されており、試掘坑埋土から大型破片を含む陶磁器片・土師器片が出土したが、二次資料ながらS K 3 出土のものとみられる。

土坑壁面は下に向かって抉れ、やや下ぶくれ状を呈する。遺構の性格は不明だが、底部は不整形で、極細砂層の基盤上に粘土が風化ブロック状に水和破碎されており、調査の最終段階で底部の断ち割りも行っ

たが、性格は不明である。樹木根痕跡などが考えられるが確実できない。

2. B・C地区（管ヶ谷古墳群調査区）の遺構

伐開後の現状では竹藪であった丘陵斜面にかなりの崩落箇所がある。埴輪片が出土した試掘坑No.5もこうした馬蹄状に崩落した部分に開けられ、遺物も細片で表面の磨滅が進んでいる事から、上方からの転落遺物である事は明らかであったため、丘陵裾部に長さ約28mのトレンチ（B地区）を掘削して、遺物の分布状況や、灰原など窯業遺構の可能性を探った。結果、表土部分から若干の埴輪片を採取したのみで、深さ約1.2mで岩盤などの基盤面になり、遺構は全く検出されなかった。

また、このB地区トレンチ掘削中に、周辺の表土面から形象埴輪を含む埴輪片が採取されたため、試掘調査を補うためにも、この上方の標高約27mの緩斜面に長さ約5mのグリッド調査区（C地区）を設定した。表土面下部から円筒埴輪、形象埴輪の小片が20片ほど出土したが、深さ0.5mほどで基盤面に当たり、遺構は全く検出されなかった。B・C区の管ヶ谷古墳群調査区の面積は約150m²になった。

これら出土した埴輪片は、現在知られている管ヶ谷2号墳から直接転落してきたものばかりとは考えにくく、特にC地区から少なからず埴輪の出土がみられる事から、その南に続く丘陵尾根上に未確認の古墳が存在する可能性がある。

V 遺 物

遺物は遺構からのものを中心とし、コンテナ6箱分が出土した。時期的には、古墳時代と鎌倉時代のものが大半である。個々の遺物紹介は観察表に譲り、遺構ごとに概要を紹介していきたい。

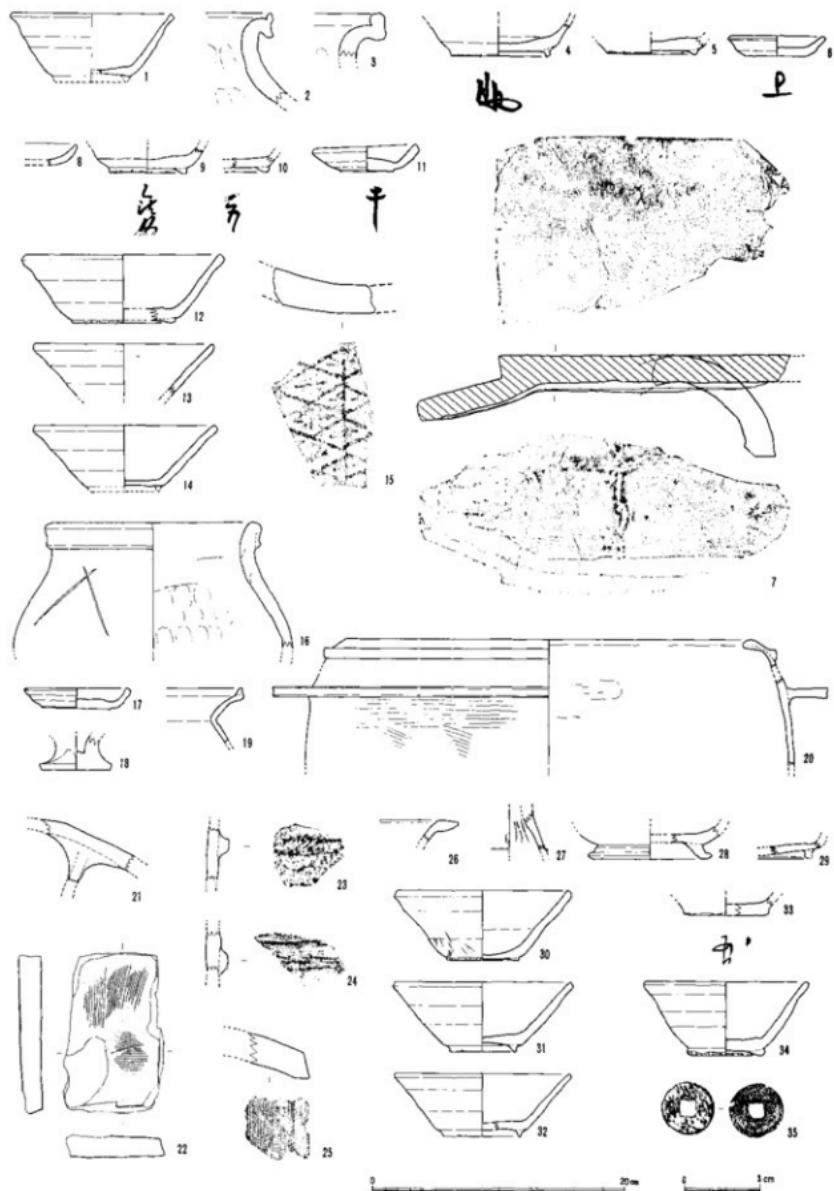
S K 1 出土遺物（1～3） 遺物量が少ない上、細片のみである。器種は山茶椀、陶器壺、南伊勢系土師器鍋などがある。

S K 2 出土遺物（4～7） 4の山茶椀の底部には墨書が認められ、花押であるとみられる。6の山皿にも底部に墨書がみられ、「上」と思われる。7の丸瓦は、多量の繰に混じって出土した。内面に、抜き取り繩の痕跡が残る。埋土は上下2層に別れるが、

遺物からは時期差は認められない。

S K 3 出土遺物（8～15） 9、10の山茶椀の底部と11の山皿の底部に墨書が認められ、9は「乙法師」、11は「半」と思われる。「乙法師」の墨書は調査区の東側、平野寄りの窪田大垣内遺跡第2次調査の際も井戸から出土している。^① 13の山茶椀の内面には朱が付着している。15の平瓦は、凸面側に格子目内に花菱紋を配するタタキ目がみられる。津市大里周辺では川北城（11）や六大臣遺跡（7）出土の瓦と同型とみられる。^② 遺物からは層位の時期差は認められない。

S D 1 出土遺物（16～20） 19の南伊勢系土師器



第9図 出土遺物実測図（1：4, 35のみ1：2）

鍋の口縁部と20の土師質の羽釜は、残存状態が悪いため、一部しか図化することができなかった。20は煤が付着しておらず、二次焼成を受けた痕跡が認められない。

その他の出土遺物（21～35）埴輪はB・C地区周辺の表土と包含層から出土した。すべて角がとれており、上方からの流れ込みである。21は破片が曲線的であることと接合状況から、蓋形埴輪の笠部分と考えられる。22は端部が斜めに面取りされ、朱が塗られている点で特異だが、鰐付円筒埴輪の鋸部の可能性がある。この他にも図化できなかったが、形象埴輪片が数点出土している。

26は弥生土器高杯の口縁部の可能性がある。細片ではあるが、弥生土器は壺と甕の破片も出土している。27は須恵器高杯片である。小さな円形透かしとその下に鋸い稜を巡らす形態は、初期須恵器の名残を残している物であろう。29は須恵器台付杯の底部で、奈良時代の所産と思われる。今回の調査では、当該期の遺構は検出されなかったが、崖田大垣内遺跡第1次調査では同時期の掘立柱建物群等の遺構がみられる。⁹ その他、須恵器甕の体部片が、複数個体分出土している。

30～33の山茶椀は破片が大きく、SK3出土遺物

との時期的な矛盾はなく、試掘坑No.1の出土遺物はSK3のものである可能性が高い。

遺構の時期であるが、SK2・SK3は出土山茶椀が瀬戸窯における藤澤編年¹⁰でⅢ段階7型式に相当し13世紀後半に、SK1・SD1は伊藤編年¹¹で第4段階の範疇に入る南伊勢系土師器鍋がみられることから、15世紀末から16世紀に属するものとみられる。また遺構出土ではないものの、埴輪片は硬質のものを含まず、朱彩のものもみられる事から、古墳時代前期のものとみられる。

註)

- ① 木野本和之『崖田大垣内遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター 1997
- ② ともに実見の機会を得た。川北城出土瓦は津市埋蔵文化財センターのご好意による。
- ③ 三重県埋蔵文化財センター『大里崖田町大垣内遺跡』現地説明会資料 1993
- ④ 藤澤良祐『瀬戸市歴史民族資料館研究紀要Ⅱ』瀬戸市歴史民俗資料館 1983
- ⑤ 伊藤裕作『南伊勢系土師器集団の展開と中世土器工人』『三重県埋蔵文化財センター研究紀要第1号』 1992

第1表 出土遺物観察表

- ・番号は、本書遺物実測図番号と一致する。
- ・器種の項では、それぞれ「～形土器」の表現を省略した。
- ・法量の口径は、口縁端部の最高点を結んだ長さを示す。
- ・色調は、農林水産技術会議事務局監修の『新版標準土色帳』(1988年版)を参照した。
- ・登録番号は、遺物と図面の整理及び管理上の番号で、実測された遺物すべてに通して付されている。

番号	登録番号	出土構	器種	法量(cm)	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
1	001-01	A地区 SK1	陶器 楼(山茶椀)	口径:12.5	ロクロナデ、底部糸切り	密 約1mm長石含	並	明青灰色 5B7/1	20%	高台剥離
2	001-02	A地区 SK1	陶器 瓢	-	ロクロナデ、内面指鋼圧痕	約1mm長石含	良	外灰色 5Y3/1 内褐色 5YR4/1	5%以下	口縁部のみ
3	001-03	A地区 SK1	陶器 瓢	-	ロクロナデ、内面指鋼圧痕	薄 約1mm長石含	良	灰褐色 5Y16/4 内褐色 5YR4/1	5%以下	口縁部のみ
4	003-05	A地区 SK2	陶器 楼(山茶椀)	底径:7.4	ロクロナデ、底部糸切り、高台貼り付け、モミガラ板	やや粗 約2mm石英・黄石含	良	灰白色 7.8Y7/1	底部のみ 50%	底部に墨書き押
5	005-02	A地区 SK2	陶器 楼(山茶椀)	底径:7.2	ロクロナデ、底部糸切り、高台貼り付け、モミガラ板	やや粗 約2mm石英・長石含	良	灰白色 7.5Y7/1	底部のみ 50%	内面全体に墨付着

番号	登録番号	出土遺構	器種	法量(cm)	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
6	003-04	A地区 SK2	陶器 小皿(山皿)	口径7.4 器高1.7 底径4.8	ロクロナデ、底部糸切り 並 1mm長石含	並	灰白色 10Y7/1	ほぼ完存	底部に墨書「上」+「口」	
7	004-01	A地区 SK2	瓦 瓦	厚2.1~2.3	凸面模目タタキ、凹面布目 模、抜き取り模様	密	青灰色 55E/1~暗青 灰色 5H4/1	-	-	
8	007-03	A地区 SK3	土師器 盆	-	ナデ?	密	灰白色 10YR8/2	10%以下	風化大	
9	006-02	A地区 SK3	陶器 梗(山茶輪)	底径6.0	ロクロナデ、底部糸切り、高 台貼り付け、モミガラ痕	並	良 灰白色 7.5Y7/1	底部 60%	底部に墨書「乙法師」	
10	007-05	A地区 SK3	陶器 梗(山茶輪)	-	ロクロナデ、底部糸切り、高 台貼り付け	並 1mm石英-長石含	良 灰色 7.5Y6/1	底部 10%以下	底部に墨書痕	
11	006-03	A地区 SK3上層	陶器 小皿(山皿)	口径8.0 器高2.2 底径4.3	ロクロナデ、底部糸切り 並 1mm長石含	良	灰白色 10Y7/1~灰 色 10Y5/1	60%	底部に墨書「半」?	
12	006-01	A地区 SK3上層	陶器 梗(山茶輪)	口径15.2 器高5.4 底径8.2	ロクロナデ、高台張付、モミ ガラ痕	やや粗 1mm長石含	良 灰白色 10Y8/1	20%	口縁部混み有 り	
13	007-04	A地区 SK3	陶器 梗(山茶輪)	口径14.0	ロクロナデ	並 1mm石英-長石含	並	灰白色 7.5Y7/1	口縁部 20%	内面全体に未 付着
14	007-02	A地区 SK3下層	陶器 梗(山茶輪)	口径14.1 器高4.8 底径6.1	ロクロナデ、底部糸切り	やや密 1mm長石含	良 灰白色 10Y7/1	50%	口縁部歪み有 り	
15	007-01	A地区 SK3	瓦 平瓦	厚2.3~2.5	凸面模子目内に花妻紋を配 寸タタキ、凹面ナデ	やや粗 2mm長石-蓋母含	軟	灰白色 10Y7/1	-	
16	003-01	A地区 SD1	陶器 瓢	口径15.4	ロクロナデ、内側指捺痕	並 3mm石英-長石含	やや軟 灰 7.5Y6/1	LJ縁部 50%	体部外面にヘ ラ書き	
17	003-02	A地区 SD1	陶器 小皿(山皿)	口径7.8 器高1.65 底径5.3	ロクロナデ、底部糸切り	密	並	灰白色 10Y8/1	60%	上面灰かぶり
18	003-03	A地区 SD1	陶器 仏具?	底径5.4	ロクロナデ、底部糸切り、外 面に鉢輪	密	素地灰白色 10YR8 /1 帽に黒い範囲 7.5YH5/3	底部 90%	-	
19	002-01	A地区 SD1	土師器 瓢	-	ヨコナデ、体部外側ハケ	密	軟 黄褐色 10YR8/6	口縁部 5%以下	南伊勢系 外側に媒付着	
20	002-02	A地区 SD1	土師器 刃鉈	口径31.8	体部外側ハケ、鶏部ヨコナ デ、内面強いハケ	やや粗 2mm長石等含	やや軟 灰白色 10Y8/1	鶏部 20%	媒付着せず	
21	010-02	B地区 土支	埴輪 象形埴輪	-	接合部貼り付け	密	軟質 淡黃褐色 10YH8/4	-	風化大	
22	011-04	B地区 試掘坑6号	埴輪 鎧	-	タテハケ後ヨコハケ、朱塗 り	密 1mm長石含	軟質 淡黃褐色 10YH6/3	-	-	
23	010-03	B地区 土支	埴輪 円筒埴輪	-	タガ貼り付け	密	軟質 淡黃褐色 10YR8/4	-	風化大	
24	011-03	B地区 試掘坑6号	埴輪 円筒埴輪	-	内面ナデ、タガ貼り付け	密 1mm長石含	軟質 淡黃褐色 10YH8/3	-	-	
25	011-02	B地区 試掘坑6号	瓦 半瓦	-	凹面模目痕	並 2mm石英-長石含	やや軟 灰白色 7.5Y7/1	-	-	
26	005-01	A地区 SK2	洗牛上器 高杯?	-	ヨコナデ?	粗 2mm石英-長石含	軟 灰白色 10YR8/2	口縁部のみ 5%以下	風化大	
27	008-05	A地区 試掘坑6号	須恵器 瓢	-	回転ナデ	密	良 黒青灰 5H4/1	5%以下	外面灰かぶり	
28	008-04	A地区 試掘坑6号	須恵器 長颈壺	底径8.8	回転ナデ、高台貼り付け	やや密 2mm長石等含	良 青灰色 55E/1~5/1	底部 20%	-	
29	006-04	A地区 SK3	須恵器 有台杯	-	回転ナデ、高台貼り付け	密 1mm長石含	良 明青灰 5H7/1	底部のみ 10%	-	
30	008-03	A地区 試掘坑6号	陶器 梗(山茶輪)	口径13.5 器高5.6 底径5.7	ロクロナデ、底部糸切り、高 台貼り付け、モミガラ痕	やや粗 2mm長石大量 含	並 灰白色 7.5Y7/1	20%	全体に成形が 粗雑	
31	008-02	A地区 試掘坑6号	陶器 梗(山茶輪)	口径13.8 器高5.5 底径5.4	ロクロナデ、底部糸切り、高 台貼り付け、モミガラ痕	やや粗 4mm長石含	やや軟 灰白色 10Y8/1	20%	-	
32	008-01	A地区 試掘坑6号	陶器 梗(山茶輪)	口径13.8 器高5.6 底径6.2	ロクロナデ、底部糸切り、高 台貼り付け、モミガラ痕	並 3mm石英-長石 等含	並 灰白色 7.5Y7/1	15%	-	
33	011-01	A地区 試掘坑6号	陶器 梗(山茶輪)	底径6.7	ロクロナデ、底部糸切り、モ ミガラ痕	並 3mm石英-長石 等含	並 灰白色 10Y8/1	底部 20%	底部に墨書痕	
34	009-01	A地区 包含層	陶器 梗(山茶輪)	口径12.8 器高5.9 底径5.6	ロクロナデ、底部糸切り、高 台貼り付け、モミガラ痕	並 3mm石英-長石 等含	並 灰白色 7.5Y8/1	30%	-	
35	010-01	A地区 包含層	錢貨 寛永通宝	径2.2	-	-	-	-	ほぼ完存	

V 結語

本調査の結果、遺憾ながら試掘調査で予想された遺構は検出されず、調査対象地の範囲内にはかなり広範に人為的な搅乱や産業廃棄物等が埋没している事が分かり、密度の薄さもあって、検出した遺構はわずかであった。

A 地区の遺構や遺物からは、地形条件からみても第1～2次調査で確認されている中世大須内ムラの縁辺部である事は間違いない。今回の調査に先立つて移転された祠の地蔵尊は・石五輪塔を転用しており、かつては中世墓なども周辺に存在した可能性もあるが、今は跡を閉じて思い描くはかはない。

遺物の面では、こうした環境でありながら、鎌倉期の瓦が僅かながら出土しており、津市大里川北町の川北城跡や、大里窪田町の六六A・B遺跡などで同時期とみられる資料が知られている。窪田大垣内遺跡第2次調査や六六A遺跡でも今回と同様、花押とみられる墨書き山茶碗が出土しており、安養院跡や政所跡といった周辺遺跡とともに、寺院や中世窪田庄に関連する遺構が近傍に埋没している可能性は考えられるだろう。

B・C 地区から出土した埴輪類は、いずれも軟質

で、円筒埴輪、形象埴輪や、試掘では朱彩の施された埴輪片（縁付埴輪？）もみられる。

管ヶ谷2号墳からは須恵器高杯、甕、短頸壺、長頸壺の出土が知られており、出土状況は明らかではないが、埴輪類の出土は今のところ報告されていない。今回も試掘坑の埋土から短脚の須恵器高杯片が出土している。本文中でも触れたように、管ヶ谷2号墳以外の未確認の古墳を想定すると、より古相の前期古墳であった可能性が考えられるだろう。志登茂川流域では、大里西沖遺跡¹⁰の他、形象埴輪の出土例は少なく、その点では好資料を得たと言えよう。

いずれにしても津市大里窪田周辺では、窪田大垣内遺跡の他、六六A・B遺跡、橋垣内遺跡、大古曾遺跡、安養院跡など、近年多くの発掘調査が集中してきた。今回はこのわずか一端を担ったに過ぎないが、これらの一連の成果の有機的な統合が行われる機会を望みたい。

註) 三重県埋蔵文化財センター『津市大里疊合大里西沖遺跡』現地説明会資料 1994



調査区遠景(南から)



調査前風景(南から)

図版 2



調査前風景(北から)



A地区南半全景(北から)



A 地 区 南 半 全 景(東 か ら)



A 地 区 北 半 全 景(北 か ら)

図版 4



A 地 区 南 半 S K 1 (北 か ら)



A 地 区 南 半 S K 2 (南 か ら)



A 地 区 南 半 S K 3 (東 か ら)



A 地 区 南 半 S D 1 (北 か ら)

図版 6



A 地区 北半 捜乱坑(南東から)



A 地区 調査風景(西から)



B・C 地区調査前風景(西から)

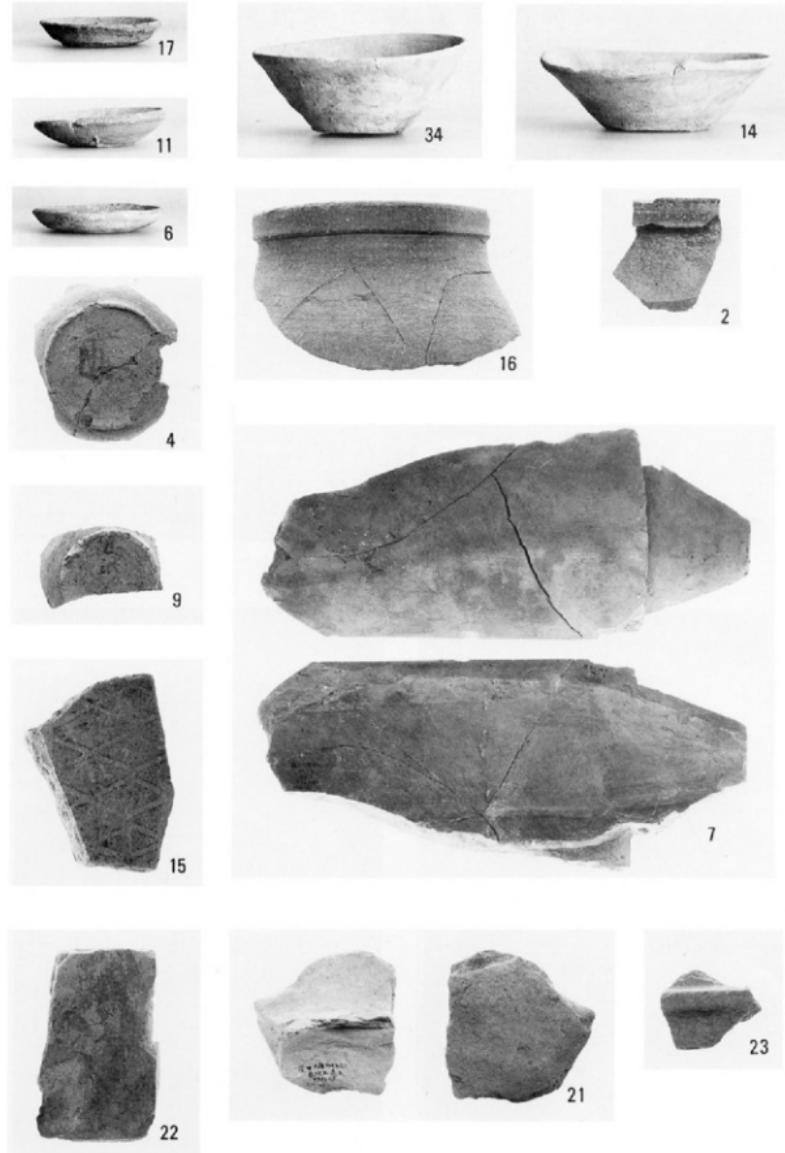


B 地区全景(南から)



C 地区全景(東から)

図版 8



窪田大塚内遺跡・管ヶ谷古墳群出土遺物

発掘調査報告書抄録

ふりがな	くぼた おおがいと いせき	すがだに こふんぐん はっくつちょうさはうこく					
書名	窪田大垣内遺跡（第3次）・管ヶ谷古墳群発掘調査報告						
副書名	平成9年度 主要地方道 津闊線国補道路改良事業地内 埋蔵文化財発掘調査報告						
卷次	なし						
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告						
シリーズ番号	173						
編著者名	大川勝宏、川崎志乃						
編集機関	三重県埋蔵文化財センター						
所在地	〒515-03 三重県多気郡明和町竹川503 TEL 05965-2-1732						
発行年月日	西暦 1997年8月20日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯 °'."	東經 °'."	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
くぼた 窪田 おおがいと 大垣内 れきしき 遺跡	三重県津市 あさひけん つし 大里窪田町 おおさとまち 字管ヶ谷・ あざなわだに 平尾前 ひらおまへ	24201 813	34° 45' 53"	136° 29' 24"	19970318 19970319 19970506 19970606	試掘20 本調査900	主要地方 道津闊線 国補道路 改良工事 に伴う 事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺跡	特記事項		
窪田大垣内遺跡	集落跡	鎌倉～室町	土坑、溝	土師器、中世陶器	中世集落の縁 辺部か		
管ヶ谷古墳群	古墳	古墳	なし	円筒埴輪片、形象埴 輪片	上方の古墳の 崩落遺物		

平成9(1997)年8月に刊行されたものをもとに

平成19(2007)年8月にデジタル化しました。

三重県埋蔵文化財調査報告 173

平成9年度 主要地方道津闊線国補道路改良事業地内埋蔵文化財発掘調査報告

窪田大垣内遺跡（第3次）・管ヶ谷古墳群発掘調査報告

1997年8月

編集・発行 三重県埋蔵文化財センター

印刷 光出版印刷株式会社